令和４年度第２回横須賀市文化振興審議会 議事概要

日時:令和４年(2022 年)11 月 10 日(木)
14:00～16:00
場所：市役所３階３０１会議室

【出席委員】 秋岡委員、石川委員、﨑山委員、芳賀委員、蛭田委員、藤井委員
山本委員、吉田彩子委員、吉田秀樹委員
【欠席委員】 若江委員
【事務局】 文化振興課 森課長、新野主査、遠藤主任
【傍聴者】 なし

＜配布資料＞
資料１ （第２回目審議会用）文化振興基本計画改訂素案

＜議事内容＞
開会
会議の成立（委員 10 名中、９名出席のため、会議は成立）

議事
１ 文化振興基本計画の改訂について
事務局 本題に入る前に２点、文化振興課の取り組みをご紹介させていただきます。
１つは、前回の審議会で 20 代から 40 代への働きかけの議論がありました。前回から今日までの間に、ファミリー向けバスツアーを実施いたしましたので、ご報告いたします。
もう１つは、小学校で行っています出前授業について、ご紹介いたします。

ティボディエ邸・浦賀ドックファミリー向けバスツアーを、10 月 22 日・29 日の２日間行いました。小中学生とその保護者を対象に 2 日間で 11 組 32 名の方にご参加いただき、内訳としては大人が 17 名、小学生が 12 名、中学生が 3 名でした。
小中学生の保護者の方ということで 30 代～50 代の親御さんと 70 代の方が１名、ご参加いただきました。
ティボディエ邸では、ティボディエ邸のスタッフによる施設紹

介後、自由観覧、シアター見学を行い、市のマイクロバスで浦賀ドックまで移動しました。浦賀ドックでは現地ガイドによる約１時間のご案内をお楽しみいただきました。
ご参加いただいた方の感想としては、ティボディエ邸も浦賀ドックも名前は聞いたことがあったけれど、行ったことがなかったがこういう機会に行けてよかった、子ども達も普段は下りられない浦賀ドックの下まで行くことができてとても興味を持っていましたというような感想を多くいただきました。

続いて、出前授業をご紹介いたします。
５つの項目をテーマとして、小学校にご案内をし、希望のあった学校に講師が訪問し、授業を行っていただくという取り組みです。これまでの浦賀奉行所や横須賀製鉄所（造船所）など近代に関するテーマに加え、今年度から山城ガール・むつみさんによる「三浦一族に関する歴史」、鶴澤津賀花さん「日本の伝統芸能・文楽に触れる三味線体験」という２つを追加し、本審議会の委員でもある山本詔一さんの３名の方に学校に出向いていただき、体育館や教室で各テーマに沿ったお話をしていただく出前授業を行っています。

以上、具体的な審議に移る前に、20 代～40 代が対象となる取り組みと、文化振興課として進めている出前授業の説明をいたしました。

それでは、本題に戻りまして、資料１をご覧いただきながら、修正したポイントを簡単に説明いたします。
（資料１（第２回目審議会用）文化振興基本計画改訂素案）

委員　改訂素案のご説明をいただきましたが、今日の手順としては、前回ご欠席の委員の方からご質問やご意見をいただき、その後に全体での審議に入るということでよろしいでしょうか。
皆さまにご賛同いただきましたので、前回ご欠席でした委員からご意見いただけますでしょうか。

委員　私が日々実感しているのは、やはり横須賀市の少子高齢化がものすごいというのをいろいろなイベント等を見ていても感じる

ところです。いろいろな文化活動を担ってきた高齢者の方々がこのままでは活動自体ができない、今後存続していくことが難しいくらい危機的な状況になっているような気がします。主に活動されている方が 70 代、80 代以上ということで、伝え方ややり方もわからないのかもしれません。
また、現在の若者の情報収集がほとんどＳＮＳになっていて、接点が全く見当たらない状況をすごく感じます。そういった世代間の交流を推し進めるようなプラットフォームが作れたら、より文化的な交流や繋ぐということに効果があるのではないかなと感じました。

委員　ありがとうございます。では、次の委員の方、いかがでしょうか。

委員　世代間交流に非常に関心を持っています。市民文化祭や歴史講座などの行事を行うと高齢者、場合によっては女性がほとんどを占めているというものも見受けられます。
文化振興施策の体系においても、「人々」という表現で書かれているところがありますが、「人々」ではなく、世代間の交流というような形で打ち出していただけたらいいのではと思っています。
この計画の最終年度の 2030 年を考えた場合、高齢者が約３分の１を占めることは大きなことだと思います。この人たちが文化の継承者でもあるということを考えますと、この世代に光を当てないということは、文化の継承の点で問題になってくるのではないかという風に思っています。

委員　ありがとうございました。続いて、お願いできますでしょうか。

委員　今、お話がありました高齢者という話にはなりますが、意外と 80 代の方が結構活躍されています。中には、90 歳前後の方もいらっしゃいます。
高齢者の方が何らかの健康の問題を抱えていることはあるでしょうが、次の世代に伝える言葉の知識は豊富ですし、経験もあります。パソコンができない方もいらっしゃるかもしれませんが、文字媒体、紙媒体でも伝えることはかなりできるはずです。
気になったのは、「障害者」と「高齢者」という表現をされてい

る部分です。障害のある人でもさまざまですから、一括りにしていいのか、いろいろな角度からご検討いただきたいと思います。
もう１点、アーティストの育成と出ていますが、そのチャンスは20代でなくても、30代でも40代でも、中には60代からでも絵をかいて入選したとか、生きがいになったという方はいらっしゃいますから、どの世代においても、若い世代だけでなく、ジェネレーションを超えて、機会があればいいのかなと思っております。
あとは、「子ども」の概念ですね。年齢的に２歳や３歳とかなのか、高校生や大学生までを含むのか、ちょっと幅が広いですよね。子ども達にとって、学校のウエイトは大きいですが、学校教育を出たところで、いろいろなことに関心を持っている子どもにはさまざまなチャンスがありますので、自分の将来をそこで決定する、あるいは、そこでの人との交流が経験として生かされ、何かに繋がっていく、例えば、福祉活動に意見を持ったというような事例があると思います。これからの横須賀市を考えるうえで、委員の方々のご指摘やご意見をどのように具現化するということが勝負かなと思っています。

委員　どうもありがとうございました。では、続いて、いかがでしょうか。

委員　この文化振興基本計画はよくまとまっていると思います。私は20年くらい前に横須賀に越してきて、そのまま定住しています。子供は市内の公立校を出ています。
先ほど、世代間の話があったと思いますが、この計画の中で、横須賀市民が自分の町に誇りを持てるというようなこと、「誇り」という言葉が１つも計画の中にないので、ぜひとも「誇り」という言葉を入れて欲しいと思います。
そのためには、学校での教育が重要なのかなと思います。私は外から来たのですが、横須賀の場合、学校教育が若干「ん？」ということを感じています。その結果がこのような状況になったのかなと思います。
公立学校の教育の中で、文化や歴史により力を入れて欲しいと思っています。その時の観点として、横須賀が発展した歴史として、幕末から急激に人口が増えてきているというところが大き

な流れで、なおかつ戦後になると米軍や外国文化もあると思いますが、そういった発展の歴史をしっかりした上で、文化振興に関する計画を作っていくのかということを述べてもらえればいいのかなと思います。そうしないと、なぜ今横須賀でこの外国の文化があるのかが全く明らかにならないので、そのあたりははっきりすべきかなと思います。

委員　どうもありがとうございました。
それでは、前回ご欠席の委員の皆さまからご発言をいただきましたので、改めて、皆さまからご意見をいただければと思います。

委員　事務局にお伺いしたいのですが、この後の流れについて教えていただければと思います。
いろいろな意見が出ていて、採否を含めて、どの時点でどのように取り込まれていくのかという点を教えてください。前回いろいろと出た意見が今回ほとんど入っていない、全部入っていない。意見みたいなものは入っていませんよね。最終的にどういう形で入れるものは入れるのか、収まっていくのか、教えていただきたいです。

事務局　９月の第１回では欠席された委員もいらっしゃいましたので、今日ご意見をいただいた段階でフラットになると捉えまして、これを１つにまとめた上で、今日のご意見等と合わせていきたいと考えています。それを来年１月の審議会で、皆さまにお示しし、最終的なご意見、議論をいただき、答申というイメージを持っています。

委員　そうすると、第３回で、この２回で出てきたいろいろな意見が書き込まれるということですね。

事務局　補足ですが、３回目になると、その反映が難しい時点になりますので少し訂正をさせていただきます。
前回お話しいただいたことは、多少なりとも盛り込んだつもりです。最初の時点で説明が足りなかったかもしれませんが、この文化振興基本計画というのは、YOKOSUKA ビジョンの分野別計画ということで、文化の振興の部分に特化しています。

このため、委員の皆さまのご意見は非常に貴重なものですが、そのままダイレクトに文化振興基本計画に盛り込むことが難しい部分もあるかと思います。本来であれば、一字一句、この場で議論すべきことかと思いますが、そういうこともなかなか難しく、その点については、あらかじめご説明させていただきたいと思います。

委員　文化というものを考えると、役所で所管している他の部署に及ぶというのは当たり前のことなんですね。例えば、文化で子どもの育成とか高齢者の施策を必要だと訴えても、それは高齢者部門だよというわけにはいかないと思うんです。
ですから、両方の部門、部署で掲げておくということもひとつの方法じゃないかと思っています。
文化施策を見た時に、それが載っていないとなると、高齢者の方の施策をまた見なければ、文化として何も取り組んでいないのかなというようなことになってしまいます。
いろいろなジャンルで同じようなことが言えますが、１つの切り口でいくつもの部署にまたがっているということが言えます。
ですから、例え、重複しても載せておいていただけた方がいいのかなと思いました。

委員　例えば、15 ページで、（１）、（２）で「郷土」と「地域」というのが出てきますが、「郷土」という意味がよくわかりません。「地域」との違いがよくわからないです。「郷土」というと、江戸時代とか昔のことかなと感じ、私には違和感があります。
そのあたりを説明いただけるとありがたいです。
それと、「市民」と「市役所」というか、「市民協働」というような「市民」と「市役所」が一緒になって何かをやるような言葉がないのかなと思いました。例えば、NPO とか「まち歩き」とか「まちづくり」とかそう言う言葉が全然見えてこないので、寂しさのようなものを感じました。
ぜひ、「郷土」と「地域」の違いを教えていただければと思います。

事務局　「郷土」と「地域」の話ですが、現行の計画作成時に議論をした結果、今の状況になっています。イメージとしては、「郷土」と

言うと、横須賀全体というようなイメージで、「地域」と言うと、なんとか町というような狭い範囲を指すものかなと思います。

委員　今ご説明があったように、やはり郷土の方が広くて、地域が狭いということで国語教師の立場からしてもよろしいのではないかと思います。
当時、議論はなかったような気もするのですが、暗黙のうちに皆さんが受け入れていっているんじゃないかなという感じがします。

委員　一般の市民が見た時に「郷土」というのを横須賀市全体だとイメージするかというと、たぶんしないと思いますよね。今、横須賀市で「郷土」という言葉、ほとんど使われていないですよね。

委員　今の議論ですが、私は横須賀市で生まれて育って、学校教育を受けました。1 つの事例ですが、小学校の社会科のサブテキストで、「郷土横須賀」という薄い本が配られていたことがあります。
「地域」というと、今住んでいる「地域」で、「郷土」というと横須賀市の歴史なのかなというイメージを持っています。
言葉の定義はすごく大事なので、冊子の作成には間に合わないと思いますが、少なくともホームページに市民の方が理解できるような定義付けは全部一覧で載せていただいた方がいいかなと思います。
今の横須賀市の学校教育は存じ上げませんが、私たちの時代には横須賀市の文化を学ぶという学校教育は、「郷土横須賀」もありましたし、音楽で横須賀市歌の授業がありましたから、市歌は３番まで歌うことができます。
同級生たちが 50 代半ばになり、かなり横須賀に戻ってきていますが、小学校の時の教育というものが横須賀への定着化や横須賀市を知るというところに繋がっているのかなと思いました。

委員　言葉の定義は掲載した方がいいのかもしれませんね。

委員　郷土教育という言葉があります。明治、大正では郷土教育が非常に盛んでした。「郷土横須賀」とか「郷土どこそこ」とか。ですので、郷土というと、我々が住んでいるような地域、字より広い

概念だという感じがしますよね。
社会教育の方で言いますと、コミュニティセンターという言葉を使いますが、地域社会というものです。こちらも地域社会ということで、「地域」ということをすごく優先しますが、こちらは町内会くらいの広さを指している例が多いと思います。
今回のように計画に掲載するのであれば、こんなことで「地域」という言葉を使っていると例示しておくと、市民にとってはすごく参考になると思います。

委員　今回の資料を改めて、読んでいくと、YOKOSUKA ビジョンとの関係がもっと気になってまいりました。YOKOSUKA ビジョンとの関連を意識した今度の基本計画になるということですが、書き方の姿勢がだいぶ違うように感じました。
現行の基本計画はいろいろな議論の積み重ねではありますが、古い議論と今の議論が一緒になっているように思います。例えば、「郷土」という言葉も、以前、論じたかもしれませんが、今は当時とは違う状況になってきていますので、例えば、今に合わせるのであれば、新しい視点からもう一度見直すことも必要ではないかと思っています。
特に気になったのは、先ほどお話がありましたが、市民と市との関係で、こういう言い方は悪いのですが、上から目線的なものがなかったとは言えないように思います。
例えば、「はぐくむ」という言葉であれば、育ててあげるというようなニュアンスは少し残っていたり、「つたえる」ということも誰かが誰かに伝えてあげるというスタンスが、そのつもりはなくても残っていたと思うんです。YOKOSUKA ビジョンのコンセプトに変わっていくのだとすれば、「はぐくむ」ではなく、「そだつ」になると思います。現に、YOKOSUKA ビジョンの中では、「育てる」という言葉は使っていなくて、市民あるいは子ども達が「育つ」、あるいは、世代を超えて共に育つという表現になっているので、そういったものに変えていくか、あるいは、「つたえる」は「つたわる」という表現に振り替えるだけで、上から目線がなくなってくるように思います。
文化振興基本計画の基になる文化振興条例では、「主役は市民です」とはっきり言っているわけなので、市民目線でもう一度新しく見直していく必要があるのかなと思いました。

「広げる」というのも広げてあげているみたいな感じがしますので、「広がる」というようにしていくと、そこに関わっている人たちがみんなと繋がって広がっていくというイメージになるので、そういった視点で考え、YOKOSUKA ビジョンに近いレベルのものにしていくと、整合性という点でいいのかなと思いました。

委員　横須賀という町は大変難しい町だと思っています。寄せ集めて作られた町で、本当にみんなで仲良くして集まろうというわけではなく、ある意味、軍の力を持って、昭和 18 年に集められたところです。それがやはり今のいろいろな文化、地域文化でもなかなか浸透していかない部分があります。
東京湾側ではすごく盛り上がるんだけれど、相模湾側へ行くとそれほど盛り上がっていないというのは明確に見えています。
そのあたりをどういう形でクリアしていくのかというところだと思います。
その言葉が郷土がいいのか地域がいいのか、エリアというとわかりやすいのかもしれませんが、こういうことを少しずつ削って丸くしながら、１つのものを作っていかなければいけないのですが、もう 70 年以上、こういう議論をしているのでしょうが、相変わらず、変わらない部分があるということは、この先どうクリアするかが求められていることだろうと思っています。
私は１つ、相模湾側の方と東京湾側の方、海の違いをはっきりさせながら、そういう言葉でやっていくということが１つにはできていくのかなというように思っています。なかなか反映することは難しいと思ってはいますが、どこでも同じようなことをやろうとすると、横須賀という町は大変難しくて、何度やっていても同じことを繰り返すのではないかと思っております。それを考えて、一生懸命やっていかないといけないと思います。
そう考えますと、私も長いことこの審議会の委員をさせていただいていますので、もう少し全体がリフレッシュした方がいいのかなと思っています。
新しい委員の方のような考え方をお持ちの方や横須賀に入ってきて、新しい目で横須賀の町を見てもらえる人たちがやはり必要になってくるように思います。

委員　　誠に同感でございます。
これは横須賀の町の難しさに当たるかどうかわかりませんが、基地や戦後すぐの問題など、市民としてはどこまで触れたものかと思うこともあります。でも全てが大切な歴史なので、そういうことも、タブーと感じることなく話し合えればいいなと思っています。

委員　　中身の話になりますが、20 ページに景観の保全及び形成というものがございます。これは、横須賀じゃなくても、どこの町でもこういったものが出てくるように思います。
ですので、文化振興基本計画を作るのであれば、具体的にどういうものかというものを入れてもらえると非常にありがたいです。
横須賀には戦前の建造物もありますし、町の発展に伴う坂もありますし、擁壁を見るとブラフ積というものも多数ある。そういった特徴的なものを提示していくと、横須賀の文化振興基本計画として、外の人が見ても非常に楽しいものになるのかなというように思います。
また、21 ページに地域間交流というものがありますが、日本遺産として旧軍港四市が指定されていますが、その４つの市の交流は非常に大切だと思っています。市としてやるべきことなのではと思っています。
もう１つ、横須賀と北九州の間でフェリーが就航したことを通して、交流をやるということも横須賀らしいことなので、そういうのも入れてもらうと非常にいいのかなと思いました。
今回は三浦一族とかが多くて、近代化のわかる部分が項目として外れているものがあるということで、近代化に関することがだんだん少なくなってきているので、市の成り立ちの経緯と計画を見た場合にアンバランスなのかなと思いました。
最後に横須賀は登録文化財があまりないと伺いました。登録文化財は市が指定するものでもなく、一般の方が持ち主の場合もあると思いますが、登録文化財の数がどうかというようなことを指標として入れていくと市民の方が関心を持つのではないかと思います。

委員　　今のお話に関連しますが、景観の保全及び形成はどこの町にも言えるようなことが書いてあります。平成町のあたりを散歩し

ていますと、せっかくの港なのにたくさん船がついていて、塀で遮断されていて、全然海の風景が見えません。海の風景が見られるところというと、海辺釣り公園などの方になり、住んでいるところからは離れたとことになってしまいます。だから、なぜ、海の見える風景をなぜ遮閉してしまっているのかなと思います。理由はあるのですか。

事務局　国際的な貿易もやっていますので、ソーラス条約に基づき、外航船と港湾施設の保安対策の強化が義務付けられている部分もございます。このため、景観や美しさとは逆方向で安全性の面が求められている部分もあるところが現状となっています。

委員　１つ確認ですが、21 ページに「ここヨコホームページ」の活用というのがありますが、今は名称が変わっていて、「横須賀市観光情報サイト」に変わっているように思いますが、いかがでしょうか。
また、文化による地域間交流、人々の交流の推進ということがこれからすごく大切になっていくと思います。北九州と横須賀を結ぶフェリーもまた１つの文化が生まれる大きなチャンスだと思います。
ここに出ている例を見ると、歴史的なつながりがメインになっている気がしますが、それ以外にもこれから生まれてくる繋がりが出てくると思います。
市内の文化活動をされている団体を見ていても、人数がすごく減ってきているので、１つの団体のみで発表るすることが難しくなってきています。その中で、例えば、建築とフラワーとか、書道と手芸というように全然違う団体がジョイントして、一緒に発表を行い、それぞれの集客があるような形でうまく乗り切ろう、工夫してやっていこうというところもあると思います。またもっとそれを大きく広げると、例えば、横須賀市の友好都市でもそういった発表をされているような人々もいると思うので、交流の幅を多角的に捉えて推進していけるような取り組みが今後新たに生まれていけば、何かまた新しいチャンスがあると思います。地理的なものですと、北九州と横須賀で何か交流が生まれれば面白いと思いますし、東京湾フェリーで金谷とも活動が生まれてると、もっともっと人々の交流があれば、そこに活躍す

る場が生まれてくる方もたくさんいると思うので、そういったものも少し必要なのではないかなという風に思いました。

委員　前回も質問させていただき、今回もあまり反映されていないと思ったのですが、政策自体は観光でただ訪れて終わりでよいのか、それとも将来的に住んでいただいて、人口増のところまで考えられているのかというところをもう少しお伺いさせてください。
意見として、少子高齢化の背景についてですが、本来、少子化という問題と高齢社会とは別の問題です。政策としては、分けて考えたほうがいいかなと思います。
戦略的にという話ですが、どうしたら文化が広がるかなということを考えていました。世代間交流ということばかり考えていましたが、その考え方を一度やめて、11 ページを見るといろいろな産業とかアートとか歴史とか、知っている世代というのがあるわけですよね。
そこで、知られていない方を引っ張るのではなくて、知っている方々、世代にターゲットを絞って、インフルエンサーとして活用したらどうかなと思いました。
やはり、知らない方に知っていただくことはとても難しいです。特に、20 代、30 代であれば、上手にＳＮＳとか情報発信をできるので、その方から広めていただくほうが早いし、楽ではないかなと思います。

委員　ご意見、ありがとうございました。
続きまして、前回の審議会資料の指標について、ご意見がありましたらお願いします。

委員　生涯学習センターにおける相談件数ですが、この 26 件、13 件はどのような内容のことを指して、統計としているかが大事ですね。図書館のレファレンスサービス、相談の件数、ただ電話で答える件数なのか、その中身が非常に深い内容なのか、あるいは次の活動に繋げるような照会なのか、内訳をきっちり整理しないといけないと思います。
生涯学習センターの命は、レファレンスサービスです。図書館もそうですが、相談がなければ、その施設はいらないのではないか

という人もいるくらいですから、これは調査したほうがいいと思います。
実際、生涯学習センターに行くと、窓口でいろいろな方が相談に来ています。図書室も利用されている方が多いです。このあたりは行政として把握しておかないといけないと思います。

事務局　ありがとうございます。今ご意見いただいた部分ですが、別紙では「考え方」を省略しています。生涯学習センターの相談件数については、「生涯学習に関する市民からの相談に応じ、生涯学習に関する情報を提供する相談コーナーの相談件数により、生涯学習に関する情報提供の充実を図る」としています。ご意見いただきましたとおり、この件数の内訳は改めて確認いたします。
補足としましては、情報提供の充実度を図るという観点からいくと、情報提供が元々できていたら相談が少ないのかもしれないし、情報提供が足りていなければ相談が多いかもしれないとも考えられますし、なかなか解釈が難しいと思っていましたので、ご意見をいただきたいなと思いました。ありがとうございます。

委員　生涯学習センターの指定管理者の委員にもなっているのですが、利用者は多いという話です。アップデートな情報から教育活動に関する内容、学校教育や人材紹介など、そういった意味では一番の基準は図書館のレファレンスサービスのレファレンス体制で、いろいろなやり方があるので、生涯学習センターの相談が単なる情報提供という言葉でいいのかどうかというところ、概念としてどのような捉え方をするかというところからスタートしないと少し間違った解釈になるのかなと思います。

委員　では、もう１つのカレーフェスティバルのほうはいかがでしょうか。

委員　これが何で保留なのかもう少し理由を教えてください。

事務局　カレーフェスティバルについては、「文化による人々の交流の推進」という項目の１つとして来場者数を指標としています。
同じ項目では、よこすか開国祭、みこしパレード、日米親善よこ

すかスプリングフェスタがあります。
開国祭は、開国の歴史、みこしパレードは地域のお祭り、地域の文化、よこすかスプリングフェスタは国際的な文化交流といった観点で捉えられると思います。
一方で、カレーフェスティバルに関しては、海軍のレシピを使うという歴史を伝えるという観点でも見れますが、行政主導の地域おこし的な成り立ちによるイベントという側面があるので、「文化による」という部分で違和感があるというところで、ご意見をいただきたいと思ったところです。

委員　食というのはやはり大きな文化でありますし、カレーがその町の中に広がっていくのに海軍さんが果たした役割もあります。実際にカレーフェスティバルの日は人がすごい多いですよね。逆に、みこしパレードはなくしてもいいかなと思います。神輿は作りものですし、これも他を真似てやっただけのことですよね。カレーフェスティバルに関しては、横須賀市が主導的に動いていくことで、海軍の肉じゃがみたいなものが出てきたりしていますよね。これを保留という考え方をすること自体がおかしいのではないかと思います。

委員　カレーフェスティバルは第 1 回から参加しているので、話をさせていただきたいと思います。
最初は 8 月にやっていたんですよね。鳥取県からの出店はカレーではなく、らっきょうを売り込みにやってきていました。そのうち、鳥取はカレールーの消費量 1 位というのを武器にカレーで出店され、全国からいろいろな団体がご当地カレーのＰＲに来るようになった感じです。
イベントが終わった後に、全国から横須賀に出店してきたカレー事業者の方々の懇親会があり、毎年その司会をさせていただいていました。司会をさせていただくにあたり、全出店者のバックグラウンドを調べて、どういう文化的な土壌があり、そのカレーが生まれたのか、行政主導なのか、地元の食材をＰＲしたいからなのか、それをカレーに入れ込んだのか、そういったことをリサーチして、話を伺うことがあります。そうすると、皆さん、本当にすごい。カレーというものを通じて、文化がこれだけ交流できるんだなというものをすごい感じています。

ただ、残念なことは、全国のカレー事業者の皆さんの熱い思いがほとんど市民の皆さんに出されていないということですね。それらが知られることなく、帰られてしまうことがすごく残念だなと思っています。
委員がおっしゃったとおり、歴史的なものは横須賀もだいぶ発信しているので、事前にこう言った知識はあると思いますが、カレーフェスティバルがいかに地域交流として文化的な側面があるということを多少盛り込んで発信していけるとよいと思います。
今、カレーフェスティバルは新たな時代に入っていると思います。今まではカレーを事業者の皆さんがとにかく完売すればいいというような感じだったところもあったと思います。
そこから一歩進んで、横須賀がカレーの文化交流ということを主導し、わかりやすい形で発信していかないと、本当にずっとカレーを売って終わりというようなもので終わってしまうので、イベントが終わった後、参加者の皆さんとの交流をもっと市民に出していけば、本当にすごい可能性のある文化的なイベントになっていくのではないかと思います。

委員　カレーフェスティバル、最近は５月にやっていると思いますが、私もファンの１人で、会場を訪れますが、集客力がすごいなと思っています。6 万 5 千人という数字はどうカウントされているかはわかりませんが、浸透度はあると思います。
海軍カレーのお店も人気はあると思いますので、カレーフェスティバルは保留ではなく、推進、違った段階での行政の支援、横須賀を知ってもらう機会として、大変に人数であることは事実なので、その成果はかなりあるということだと思います。

委員　他に何か指標に関して、あるいは計画全体について、何かございましたらいかがでしょうか。

事務局　みこしパレードについて、お話がありました。
以前、応援職員として携わったことがあるのですが、出演順を決めるくじ引きを文化会館で行うのですが、すごい盛り上がりで大盛況ですし、アメリカの方も神輿を担いで練り歩くというのは、日米の文化交流というところで、横須賀らしさがあると思い

ますし、今後もやめることはないのではないかと思います。

委員　　指標に該当するかわかりませんが、よろしいでしょうか。
猿島や千代ヶ崎砲台は史跡に指定され、去年から千代ヶ崎砲台は一般公開をしていると思います。また、猿島は夜にいろいろなイベントもやっていると思います。
例えば、猿島や千代ヶ崎砲台を訪れた人数というのはこういう指標には該当しないのでしょうか。
他にも、例えば、MEGURU というイベントもやっていますよね。
県外からいろいろな人が来ているので、そういうイベントの数や人数もわかるのであれば、数を把握するのは簡単だと思うので、指標になるといいのかなと思いました。

事務局　　MEGURU というイベントについては、国の補助金を受け、新たに動き始めた施策です。今年は昨年に続いて、第２弾ということで 11 月、12 月に行います。
千代ヶ崎砲台については、先日、一般公開から１年が経過したところです。

委員　　18 ページのところで、学校教育における文化活動の充実という項目があり、（２）のところで、横須賀総合高校の生徒と海外高校生との交流の促進の推進というのがあります。
横須賀市が主体となり、高校生を対象に何かをやろうとするとき、いつも総合高校の生徒というように、横須賀市立高校の生徒だけが対象になっているような気がするんですね。
横須賀市内には県立高校や私立高校もたくさんあるのに、その人たちは横須賀市民なのに横須賀市のこういう行事とは離されてしまう、対象になってこないということがよく見受けられるような気がします。
同じ横須賀市民なのに、県立高校だから対象としないという枠を設ける必要はどこにあるのかなと思います。

事務局　　横須賀総合高校には、市外からも生徒さんがかなり来ていて、横須賀市民だけという意識でやっているわけでもないと思います。
全般に言えることですが、どうしても行政のやることですので、指標が取れるところ、継続性がある事業、現在やっていることを

主なものとして、記載してきていると思います。
先ほど、MEGURU の話が出ましたが、MEGURU は国等からの補助金を多く受けている事業です。それ以外でも市の事業では補助金を受けている事業が多く、補助金次第で今年はできたが、来年はどうなるかわからないというものがあります。そうすると、そういった事業を指標に取り込んでいいのかどうか踏み込めない部分があります。
文化振興基本計画をまとめていくという観点で、どうしてもそこの縛りがあるという部分がございます。

委員　もう一度、最初に申し上げた流れの確認ですが、先ほどの話ですと、３回目に出てきたものに対しては、それほどもう手を入れられないということで、今日まで出たもので、取捨の上、ここに残るんだというようなことでしょうか。
今日ここでまた申し上げないと最終的にも残らないということはあると思いますので、前回の繰り返しにもなりますが、お伝えさせていただきます。
19 ページの地域の身近な歴史や文化の継承のところで、いくつか具体的なことをご提案いたしましたが、その中の根幹になるのはやはりコミュニティセンターの活用ということです。これはルートミュージアムの活用とありますから、その下のあたりに入れていただいて、古い写真の展示や古老の方から話を聞く会なり、いろいろなことができるとも思います。
元々、コミュニティセンターの活用の仕方がどうなのかなという思いはずっと前から持っていまして、まさにこういう項目、目的のためにある組織なのではないかと思います。

委員　京急さんがウォーキングのイベントをやっていると思うのですが、民間がやっていることは計画には入ってこないものなのでしょうか。歴史文化なのか遺産の継承なのかわかりませんが、市と民間がいっしょにやっていくという事例としてよいのではないかと思いました。

事務局　貴重なご意見ですので、盛り込んでいくとしても、もう少し可能性みたいなものを含めた部分での書き方にはなると思います。
また、１つの企業の名前を出すのは難しいものと思われます。

委員　　先ほど、コミュニティセンターの活用をお話しされましたが、私も思っていたことがございます。
コミュニティセンターの中からいろいろなサークルができて、活動をしてきた時のバックボーンは生涯学習課だったんですね。それが市民部に移ってからあっさりし始めてしまった。
やればいいんだろうというような形で、講座が行われ、それを継承したり、自分たちの手で作り上げたり、自分たちのものにしようというものがなくなってきているのではないかと思います。
そのあたりは、市として、どこにそのウエイトを置くかで、今はコミュニティセンターについて、教育委員会はほとんどタッチしていないと思います。
以前であれば、コミュニティセンターに行った指導員は社会教育指導員の資格を取らないといけないというのがあり、一生懸命に活かそうとしていたが、それができなくなってしまっていることが、あっさり感が出てきているのかなと思います。このあたりの部分を見直しをしないと本当に深く入っていかないのではないかと思っています。

委員　　コミセンって、公民館だったんですね。横須賀の場合、公民館の歴史は戦後すごく古かったんです。それをコミセンにするということは、行政の転換であって、それは教育委員会の事業、例えば、学習講座は教育委員会の所管事項として残し、建物の管理運営については市長部局に持っていくという話だったんですね。
公民館ということを考えれば、集まる、学ぶ、結ぶという基本原理があります。地域の人たちが拠点となる施設に集まって、お互いに学びあって、そこにいろいろな助け合いだとか、相互扶助的なグループやサークルができて、それを結んでいくというもので、それがボランティア活動とかの原動力にしていこうということですね。
コミュニティセンターを公民館と名称を変えるということではなく、もう少し事業の転換を、再検討するというか、地域社会に根付いた今こそ、地域の歴史や文化、遺産の継承という話でも出ましたが、もう一度役割を検討することはすごく大事かなと思っています。
それからもう１つ、学校教育における文化活動の充実の中に、「美

術館、博物館と学校教育との連携」というのがあります。
そこに何で、図書館と生涯学習センターが出てこないんだろう、公民館も入ると思うんです。ずっと繋がるわけですね。横須賀中央駅のところに児童図書館がありますが、文部科学大臣賞をいただき、非常に先駆けた誇るべき立派な施設だと思います。学校教育は図書館と関わり持っていると思うんですよね。生涯学習センターもその拠点としてあるわけなので、例えば、いろいろな文化活動の講演会やサークルがありますし、市民大学もあります。学校教育の活用の場として、広がっていないということが感じれれますので、高校でも大学でも交流は考えられると思います。
今、鎌倉では青年教育を拠点としてやろうという取り組みが１つあり、鎌倉女子大が中心となり学生がボランティア活動やいろいろな地域の人たちとの関わりといった活動をかなり進めています。
青少年教育の一環として、横須賀でも行っているところはありますので、コミュニティセンターと社会教育としての図書館、生涯学習センターの活用をよろしくお願いいたします。

委員　　二人の委員からお話がありましたが、事務局的な立場にある職員の教育が足りないのではないかと思います。私も今のコミセンで講座などを受け持たせていただくことがありますが、丸投げという感じがして、こう言いういい方はよくないかもしれないですが、何か考えてくださいという感じで話があるわけです。それよりも、こういうことをやりたいからここまで考えたけど、その知識を付与するための講座をということであれば構いませんが、１から私が考えなければならない、講師が考えなければならないというような雰囲気があるような気がします。
社会教育実習とまではいかなくてもいいですが、主催者教育、指導者教育、主催者を教育するための何かが必要ではないかという気はいつもしています。
例えば、17 ページの障害者の学習の機会の提供とのところに、いろいろな講座等を行いますとありますが、その前に主催者教育を行いますくらいのことを書いたらどうかなと思いました。

委員　　先ほどのお話を伺いまして、思い出したことがありました。生涯学習センターの中で ABC プランというものがありました。それは

何かというと、市民の方々に講師としての教え方を教え、データベース化して、その方が講師になり、講座をやるというものを私が生涯学習センターの方と一緒に12、3年前に3年間かけて全部作りました。
今のお話ですと、どうもそれが使われなくなってしまっているようですので、そのシステム、仕組みがあるのであれば、それをそっくり文化振興の方に活かせば、市民の方の中にも文化講座やウォーキングのガイドができるという方もいらっしゃると思います。
その方々に「教え方」などを教えて、「文化なんとかサポーター」みたいな名前を付けて、データベース化してマッチングということはそんなに難しくはない思います。
それが、例えば、高齢者の方々の新しい役割やボランティア活動の1つになればよいと思います。また1つの仕事として、職員の方だけでなく、趣味で教えあう、伝えあう、そんな仕組みができるのではないでしょうか。
人材育成を職員の方だけでなく、市民の方も巻き込んで、コーディネーター養成とデータベース化して、マッチングできるような仕組みを構築できるとありがたいです。

委員　今のご指摘にありましたが、今でもABCプランは活用されていて、さらなる進化をしているはずです。生涯学習センターは市民大学講座を大事にしているところがあります。それが文化振興基本計画ともうまくリンクできるものだと思います。
それが今後、コミュニティセンターの活動につながりになっていくといいのではないかと思います。
また、講座が講師任せになっているという点ですが、公民館主事というものがいて、公民館主事が企画立案のベースにするという基本原理があるわけですね。それが崩れてしまっていて、行政の大きな課題になっているように思います。ぜひ、生涯学習センターを活かしていくと、文化振興を重層構造で推進していくことができるのではないかという気がいたします。

委員　先ほどから、文化活動なのに市の中で管轄するところが違うと、こちらには見えなくなってしまうので、それもどうなのかという話が出ていたかと思います。

今日の指標の表の中でも横須賀芸術劇場の合唱団の活動が以前は入っていたものが、指定管理者の案件なのでと消えていってしまうことがわかり、この審議会でいろいろと文化全体を論じているのかなと思うとそうではなくて、これはあっちですというのが結構出てくるんですね。
やはり市民の目線から見ると、なぜ、これが入っていて、これが入っていないのかというようなものがわからないと思います。それは管轄が違いますと言われても、そこがかわらないので、そういった点がわかるような工夫があるとよいと思います。
例えば、2 ページ目の下のところに、YOKOSUKA ビジョン 2030 との連携で分野別計画の１つだというようなことが書いてありますが、これにより他と連携していることがわかりますし、ここに全部盛り込んでいるわけではないこともわかるかなと思いました。
そうしないと、やっていないようものがあるように見えてしまう心配があります。

委員　ありがとうございます。活発なご意見をいただいておりますが、他にいかがでしょうか。

事務局　今後のスケジュールの話をさせていただきます。
今日いただいた意見を踏まえた内容を委員の皆さまにご確認いただいた後、11 月 25 日から 12 月 15 日でパブリック・コメントを行いたいと思っています。
つきましては、来週の早い段階で委員の皆さまにご確認いただけるよう資料を整えたいと思います。
次回、第３回の日程ですが、１月 12 日、木曜日の午後２時から 302 会議室で行いたいと思いますので、改めて、通知はお送りいたします。
次回の審議会では、改訂案の話と令和３年度の進行管理の話をさせていただき、ご意見をいただきたいと思っております。

委員　ありがとうございました。それでは、以上で、本日の議題は全て終了しました。これをもちまして、令和４年度第２回文化振興審議会を閉会いたします。委員の皆さま、ご協力ありがとうございました。